

大郷浩斎及び大郷学橋の漢詩文集の研究

前 川 幸 雄

本稿は鯖江藩の儒員であった大郷浩斎とその息子・大郷学橋の漢詩文集の概要について記すものである。

前書き

鯖江藩の学者・藩士の文学関係の著書で鯖江地区に残っているものは、殆どが漢詩集で、その他では、わずかに「漢文集」がある。また、「鯖江地区の漢文学者・漢詩人」で、今日まで漢詩文を伝えて来た家系をみると、主なものに五氏の家がある。その中の一つに大郷家がある。そこで、以下に大郷家の浩斎と学橋の著書について概要を記す。

大郷家について

大郷氏は、信斎、浩斎、学橋の三代の学者を出した。

信斎（明和八年〈一七七二〉～弘化元年〈一八四四〉）は市橋家から養子に入った。名は良則、字を伯儀、金蔵と称し、のち信斎と号した。幼少の頃から芥川思堂（鯖江藩儒官）に師事し、経史を修めた。のち江戸に出て、昌平校に入学、林大学頭述斎について学んでいる。鯖江藩では文化十年（一八一三）に江戸三田小山邸に学問の稽古所を開設しているが、この時信斎はその取締役になっている。この稽古所は天保十二年（一八四一）惜陰堂と命名されるが、その際信斎は教授に就任、以後惜陰堂は大郷氏の管理するところとなった。

信斎は林述斎の信任が厚く、述斎が江戸麻布古川端に学問所を建てて、これを「城南読書楼」といい、俗に「南校」といった。信斎はこの南校の教授に就任し、二十年間余りその職にあった。南校は後に幕府学問所麻布教授所に発展する。信斎の学風はいわゆる昌平学派である。七十三歳で没し、墓石は東京芝の長慶寺中正寿院にある。『信斎文集』、『遊囊賸記』、『道聴塗説』などの著書がある。

浩斎（寛政五年〈一七九三〉～安政二年〈一八五五〉）

は、須子孫作の弟の博を大郷家の嗣子としたものである。名を博、号を浩斎という。江戸惜陰堂および城南読書楼の教授に就任した。著書に『漢詩集及び浩斎文稿』と『促月亭詩會發題三十首共分韻』がある。

学橋（天保元年〈一八三〇〉～明治一四〈一八八一〉）

は、名は穆、通称は巻蔵といい、字は穆卿、学橋はその号である。昌平校に学ぶ。若くして昌平校に入学し力量を発揮して、二十六歳の時に江戸惜陰堂および城南読書楼の教授に就任した。七代藩主詮勝が老中職にあった時、学橋は諸藩の志士と交わり国事に奔走した。この事が知れ渡ると詮勝は学橋を鯖江へ帰藩させた。維新後は大蔵省に出仕した。著書に『学橋遺稿』がある。

大郷浩斎の著書について

前述の通り二冊ある。以下に書誌を記す。

（一）

- ①書名、『漢詩集及び浩斎文稿』。写本であって、題箋がないので、書名は筆者・前川が付けた。前半の「漢詩集」は内容を見て付けた。後半は、十四丁に「浩斎文稿」と記載があるので、それを採って付けたのである。
- ②巻数、一卷。
- ③冊数、一冊。
- ④著者名、大郷浩斎（博）。
- ⑤編者名、大郷浩斎（博）。
- ⑥出版地、出版せず。
- ⑦出版者、出版せず。
- ⑧出版年月日、出版せず。

作品の三十五番の後に、評を書いた齊藤正謙の状況を記した短文がある。日付が「庚子」（一八四〇）となっている。また、作品の四十七番の末尾に「天保十三年青龍集壬寅（一八四二）四月上浣，鯖江後學須子博謹撰。」とある。この二つの記述から天保十一年～十三年ころに編集されたものと判断した。

⑨丁・頁数，三十一丁。（二十六頁）。

⑩写真数，無し。

⑪体裁，写本袋綴。

⑫大きさ，縦二十八・〇cm×横二十・〇cm。

⑬帙の有無，無し。

⑭所蔵者，青柳宗和氏（鯖江市立資料館）。

⑮作者履歴，

本姓須子氏，信斎の養子。名は博，博通，博須。号は浩斎。昌平学派。鯖江藩儒。惜陰堂・麻布学問所教授。寛政五年（一七九三）生まれ，安政二年（一八五五）七月六日歿。六十三歳。

⑯巻頭作品

句番号，本文	（押韻）	＜注記＞
豊太閤歌	豊太閤の歌	
1，五大洲中幾英雄		五大洲中 幾たりの英雄ぞ，
2，日出處特生此公	（上平一東）	日出づる処に特に此の公を生ず。
3，日輸入懷感靈夢		日輪 懷に入りて靈夢を感じ，
4，日光當照四海中	（上平一東）	日光當に照す四海の中を。
5，少時窘奴隸		少時は奴隸に ^{くる} 窘しみ，
6，未免答与罵	（去声二十二禡）	未だ答と罵りとを免れざりき。
7，雲蒸風起龍虎變		雲蒸じ 風起りて 竜虎は変じ，
8，六十餘國望風下	（去声二十二禡）	六十余国は風を望みて下る。
9，源將軍背豈足拊	＜源は右大將を指す＞	源將軍の背は豈に拊つに足らん，
10，恭獻王面便可唾		恭獻王の面は便ち唾す可し。
11，雞林羽群覆其栖	（上平八齊）	鷄林羽群 其の栖を覆し，
12，蹂躪八道殷馬蹄	（上平八齊）	八道を蹂躪し馬蹄を ^{さか} 殷んにす。
13，鴨綠水可投鞭渡		鴨緑の水は 鞭を投じて渡る可く，
14，荷擔企足遼東西	（上平八齊）	荷担の企は 東西を ^{はるか} 遼にするに足る。
15，我王日本何關汝	（上声六語）	我が王の日本何ぞ汝に關はり，
16，裂汝封冊如糞土		汝の封冊を裂くこと糞土の如し。
17，恨我土壤環大海		我が土壤の大海を環るを恨み，
18，懸車動遣風波沮	（上声六語）	懸車動遣 風波は沮し。
19，不然直入燕山中		然らざれば直ちに燕山の中へ入り，
20，擒汝皇帝誰能禦	（上声六語）	汝が皇帝を擒ふるを誰か能く禦がん。
21，君不聞 辮髮胡兒起		君聞かずや 辮髮の胡兒起つ，
22，白長白之北	（入声十三職）	白長白の北に。
23，有衆一旅甲百副		有衆一旅甲百副，
24，吞併支那至人域	（入声十三職）	支那を吞併するは至人の域なり。
25，又不聞 碧眼佛郎王	（下平七陽）	又聞かずや 碧眼の仏郎王，
26，憑陵大西洋	（下平七陽）	大西洋に憑陵するを。
27，欲舉五洲歸一統		五洲を挙げて一統に歸さんと欲し，

28, 標崑崙而爲中央	(下平七陽)	崑崙を標して而して中央と爲す。
29, 碧眼辮髮眞可偉		碧眼 辮髮 眞に偉たる可く、
30, 一成一敗亦天耳	(上声四紙)	一成一敗も亦た天なるのみ。
31, 此公儼然好敵手		此の公は 儼然たる好敵手にして、
32, 雄才天略宛相似	(上声四紙)	雄才 天略 宛も相似たり。
33, 假令各舉一方之色目		仮令 各々一方の色目を挙ぐるも、
34, 三百萬兵遇崑崙之麓	(入声一声)	三百万の兵 崑崙の麓に遇ふ。
35, 旗鼓相當風雷激		旗鼓は風雷に相当して激しく、
36, 長槍大劍互角逐	(入声一声)	長槍大劍は 互角に逐ふ。
37, 血紅直染黄河水		血の紅は直ちに黄河の水を染め、
38, 未知誰手殪奔鹿	(入声一声)	未だ知らず 誰が手にて奔鹿を殪すを。
39, 吁嗟乎英雄知英雄		吁嗟 英雄は英雄を知り、
40, 若俾相逢交相喜	(上声四紙)	若し相ひ逢へば交々相ひ喜ばしめん。
41, 日出處日没處		日出づる處 日没する處、
42, 地下本自無彼此。	(上声四紙)	地下は本自ら彼れ此れは無からん。

頭注について、この作品には頭注が二箇所にある。

①、初句の注。「破題四句包舉全章非汎然揚豊公妙」

(破題の四句は全章を包挙す。汎然に非ずして、
豊公を揚ぐる事妙なり。)

②、33句の注。「色目人蒙古人蓋部類之名此恐失窾
更洋之」(色目人は蒙古人なり。蓋し部類の名に
して、此は窾を失ふこと更に之を洋くするを恐る
るならん。)

⑩所蔵作品表

『漢詩集及び浩齋文稿』は、前半は漢詩集であり、
後半は文集である。

「漢詩集」には35作品を収める。作品番号は1番か
ら35番までである。番号、題名及び主題を記す。

1 番, 豊太閤歌 (楽府体)

(前掲) 巻頭作品として紹介した。(省略)。

2 番, 龍嶼石歌爲矣上快雨賦。

熊野三山の偉容を述べ、ここから竜が天上に昇つ
たと詠う。

3 番, 送士常西遊。

友人の西国へのたび立ちに際して、読書をし、豪
賢と交わり、高千穂などを訪ねよ、そして、八月

帰国の時には、旅の話を肴に飲もうと詠う、送別
の詩。

4 番, (興謝吟稿) 大亀谷。

大亀谷という景勝地の飛瀑、奇岩を尋ね、且つ老
荘的感慨を述べる紀行詩。

5 番, 磯婦怨

15歳で畝夫に嫁いだ女が、17歳で早々と夫に死別
する。30で再婚するが、捨てられる。女の運命の
はかなさを詠う。

6 番, 養父驛。

父は子供を育てるが、子供は必ずしも父に孝養を
尽くさないと言う。

7 番, 贈虚無僧猶存。

虚無僧が故郷を思い、無意識に諸侯に禄をもとめ
てさすらいの旅をすることを詠う。

8 番, 出石城訪櫻井東門翁翁適遊丹後令嗣伯蘭迎余歡 飲賦謝。(楽府体)

櫻井の東門翁を訪ねたが、翁は不在で、嗣子息が
自分を歓迎してくれたことに対して謝意を表す。

9 番, 櫻老泉歌。(楽府体)

天下に有名な桜老泉の素晴らしさを詠う。

10番, 11番, 自出石到湯島舟中二首。

出石から湯島に到る舟中から見た風景を詠う二首
の作品。

12番, 残夜水明樓.

残月の夜に水明らかなる樓のいわれを, 著名詩人の詩句などを引き, 説く.

13番~16番, 湯島雑詩.

湯島に遊んだときの香泉, 取り巻く峰々, 藤簾を担うさま, 出会う人びとの様子を詠う三首.

17番, 別伯蘭叔蘭疊前韻.

8番の作品の韻字を用い, 伯蘭叔蘭(兄弟)に別れたことを詠う.

18番, 天橋歌.(楽府体)

天の橋の絶景を竜宮の浦島太郎の話に例えて詠う.

19番, 20番, 丹後道中二首.

丹後への道中の溪谷の風景と, そこに働く人びとの様子を詠う.

21番, 22番, 宿大江山下二首.

大江山の山中を行く時見た風景を詠う二首.

以下の作品は「附」の字の次に掲げられている作品.「附録」の意味かと思われる.

23番, 梅津道中.

幾度か湊川に往来したがまだ楠公の墓前で詩を詠じたことがないと言う.

24番, 仁寿山館次津田于園韻.

津田于園の韻に次韻し, 仁寿山館の様子を詠う.

25番, 于園用淡窓翁詩韻再賦一詩見贈歩酬.

(24番の詩に出て来た)仁寿山館で津田于園が淡窓の詩韻を使って再び一詩を作り(私に)贈られた.それに次韻し, 仁寿山館の情景と心情を詠う.

26番, 以秋元孚卿韻.

秋元孚卿の韻を用いて, 仁寿山館周辺の風景を詠う.

27番, 山窓雨日得韻咸

韻字咸を得て, 山を望む窓から見える雨が降る風景を詠う.

28番, 29番, 30番, 題春葉居士魚蝦小巻爲下田牧子.

春葉居士の魚蝦の写生帳に下田牧子と題を付け, 写生帳にある紅蟹や魚たち, 蔬菜を詠う.

31番, 竹詩爲四竹堂

竹林に囲まれた家から竹林を見た様子を詠う.

32番, 高台寺謁豊公夫妻像.(楽府体)

高台寺で豊公夫妻像を見て, 夫妻の苦勞を述

べる.

33番, 古琵琶引爲小竹翁囑云阿波太夫稻田氏所藏銘曰朝千鳥.

朝千鳥と云われる古琵琶の状態とそれを弾ずるときの様子を描き, 平家物語の平氏滅亡の場面を語るさまなどを述べる.

34番, 同快雨曉碧遊孔林得韻微.

韻字微字を得て, 雨に濡れた暁の林の中の様を描き, 清流, おいしい川魚の料理, 一杯の酒, 霞かかる山, 鳥魚のさま, 山寺の鐘の音, などの中に, 真機ありと詠う.

35番, 同信侯士常重遊孔林得明字.

韻字明字を得て, 白沙, 翠林, 十二年前の林の様子を重ねて描き, 先師(小竹氏)の亡きことに涙したことを詠う.

(詩体)	作品番号	(合計)
五言四句	7	(一首).
五言八句	10, 11, 31,	(三首).
五言十八句	5, 34,	(二首).
五言四十八句	4,	(一首).
五言総合計		(七首).
七言四句	6, 13, 14, 15, 16, 17, 19, 20, 21, 22, 23, 28, 29, 30,	(十四首).
七言八句	24, 25, 26, 27, 35,	(五首).
(以下は, 各句一首である.)		
七言二十四句	8, 二十六句	12, 三十句
三十一句	32, 三十二句	9, 三十六句
四十句	3, 四十一句	1, 五十二句
七言総合計		(二十八首).

(注) 1, 8, 9, 18, 32番の作品は, 楽府体である. 8番は五言と七言が, 9番は五言と六言が, 18番と32番は七言に十言が混ざっている.

⑩余説上〔漢詩集について・考察〕

1番「豊太閤歌」は豊臣秀吉の朝鮮戦役のことを詠じている. 2番は熊野三山の偉容を詠じた. 3番は送別詩. 4番は大亀谷という景勝地を尋ねる紀行詩. 5番は女性の運命を詠じた詩. 6

番は孝道について述べた詩。7番は人の生き方を詠じた詩。ここまでは、かなり力を入れた作品のように目受けられる。

これら以外の作品は、ほぼ紀行詩と言える。なお、2番、4番も紀行詩に含めることが可能であるが、2番、4番には作者に特別の感慨があるように見えるので、一応区別する。

「豊太閣歌」は巻頭作品にふさわしい力作である。豊臣秀吉の朝鮮戦役のことを詠じている。また、そこに西洋と中国のことまで持ち出している。幕末期の国家意識の昂揚を感じさせる。また、3、5、6、7番は文学らしい題目とみなされる。これらの作品を考えると、作者は、視野の広い凡庸ではない人物であると感じる。

後半の「浩斎文稿」には12作品を収める。作品番号36番から47番までである。番号、題名及び主題を記す。36番、原元辰遺物記。

筆者（大郷浩斎・博）と友人・松本有徳とが忠良について議論する。「忠臣蔵」として人口に膾炙している仇討ち事件の50年後に「赤穂浪士四十六士」の中の原惣右衛門、元辰について述べる。

37番、晏子論。

春秋時代の晏子（嬰）について論じる。

38番、諫論。

臣下が主君を諫めることの困難なことを、史上に有名な人物を例に取り上げて論じる。

39番、于祿論。

祿を求める手段の巧拙について、古今の人物を例に挙げて論じる。

40番、鳩居亭記。

鳩が住むような粗末な家・仮住まいに住むとしても、それは人物の運命によるのであって、その人の力（権力・財力）によるのではない、と論じる。

41番、王師論上。

周王朝を開いた武王の人物について、彼は天の吏であって、（殷）の紂（王）の臣ではない。よって、武王の挙兵は正しい行為であると論じる。

42番、王師論下。

徳力・智力だけで天下を保つことは難しい。人心

の求める処を見て、武力を用いることも必要である、と論じる。

43番、師道論。

その職に任じてその責任を考えないものを、師道を心得ないものとする、と論じる。

44番、送萱堂序。

門人小倉萱堂が京に行くに際して贈った文である。言行を控えめにすることを諭す。

45番、大石良雄故宅遺磚記。

磚は窯の中で焼いて堅い瓦となる。赤穂藩の大石良雄は勝れた窯である。四十五士はよく焼かれた磚である、と論じる。

46番、水府弘道館碑銘。

水戸の弘道館について述べたものである。弘道の意味を説き、日本、中国の王朝の歴史を論じることから始まって、斉昭が天保九年に館を建てたことを以て終わる。そして、片仮名混じりの文で建物の規模について述べる。

47番、進徳館記。

鯖江の藩校・進徳館について述べるものである。進徳の意義を中国の周王朝の周公の話から説き起こし述べる。

⑮余説下〔浩斎文稿について・考察〕

（漢文集）も、（漢詩集）と同様、題目・内容共に、当時の鯖江藩士としては、地元の藩士とは違い、題目が多様であり、その主張もユニークである。

⑯余説上・下〔『漢詩集及び浩斎文集』について・考察〕

鯖江在住の藩士らの作品と比べると作品の主題の範囲が広く内容も多様である。作者の見識が広く、学問も深いように感じる。これは、作者の能力が高いことはいうまでもないが、一方、江戸にいて惜陰堂・麻布学問所教授として研鑽に努めたこと、また、江戸という当時の先進都市にいたから、広く見聞することが出来、視野を広くし、高い識見を養うことが可能であったからであろうと思う。

(二)

- ①書名、『促月亭詩會發題三十首共分韻』
- ②巻数、一卷.
- ③冊数、一冊.
- ④著者名、大郷浩斎 (博).
- ⑤編者名、大郷浩斎 (博).
- ⑥出版地、出版せず.
- ⑦出版者、出版せず.
- ⑧出版年月日、出版せず.
- ⑨丁・頁数、四丁.
- ⑩写真数、無し.
- ⑪体裁、和本、写本.
- ⑫大きさ、縦二十六・五cm×横十九・五cm.
- ⑬帙の有無、無し.
- ⑭所蔵者、福井大学付属図書館. (H991-OSA-27695)
- ⑮作者履歴、前出.
- ⑯、巻頭作品

春曉 魚

啼鶯呼夢近階除 鶯は啼き夢より呼ぶ 階除に近く、
起掃浮塵整亂書 起きて浮塵を掃き乱書を整ふ。
始覺春宵苔鳧脛 始めて覺る春宵 苔 鳧^{あずき}の脛、
三杯村酒宿醒餘 三杯の村酒に宿醒して余りあり。

(脚韻) 除、書、餘 (上平六魚)。

- ⑰、所蔵作品表、
七言絶句、二十九首。(一首は写し落とした
か?) この作品集は押韻を規定している。

以下に、作品番号、題名及び押韻を記す。押韻
は () 内に示す。

- 1 番、春曉 (魚)。
- 2 番、鳴鳩呼晴 (肴)。
- 3 番、春日訪友 (覃)。
- 4 番、春日遊山寺 (冬)。
- 5 番、春日訪隱者 (微)。
- 6 番、春日烹茶 (鹽)。
- 7 番、春愁 (元)。
- 8 番、春園卽事 (東)。
- 9 番、春街觀妓 (灰)。
- 10 番、春日山居 (齊)。
- 11 番、春陰釀雨 (刪)。

- 12 番、春草 (眞)。
- 13 番、春流汎舟 (麻)。
- 14 番、春山 (歌)。
- 15 番、春宴 (江)。
- 16 番、春寒 (青)。
- 17 番、晚歸擔花 (庚)。
- 18 番、春夢 (佳)。
- 19 番、歸雁 (陽)。
- 20 番、待花 (蒸)。
- 21 番、春日郊行 (支)。
- 22 番、橋上賞春 (侵)。
- 23 番、春望 (蕭)。
- 24 番、春窓讀書 (咸)。
- 25 番、閑庭迎客 (寒)。
- 26 番、春池無 (尤)。
- 27 番、花下圍棋 (先)。
- 28 番、春浦歸帆 (毫)。
- 29 番、春雪 (文)。

- ⑱余説 (『促月亭詩會發題三十首共分題』について・
考察)

(一)「促月亭の詩会」の状況について

三十首 (一首を欠く) の作品が作られた状況の説明
がないため、詩会の様子を知ることが出来ないのが惜
しまれる。なお、題名から、詩会は春に行われたこと
だけは分かる。

(二) 押韻について

題名の下に押韻が記されている。巻頭作品を例にし
て言えば、題名は「春曉」、押韻は平声の「魚」韻で
ある。全作品の押韻は総て「平声」になっている。

大郷学橋の著書について

前述の通り一冊ある。以下に書誌を記す。

- ①書名、『學橋遺稿』。
- ②巻数、一卷.
- ③冊数、一冊.
- ④著者名、大郷学橋 (穆)。
- ⑤編者名、大郷利器太郎編.
- ⑥出版地、東京.

⑦出版者、葵華書屋藏（版）。

⑧出版年月日、明治丁亥（二十年）、一八八七年。

⑨丁・頁数、序・大沼枕山、二丁（四頁）。本文、五十六首、八丁（十六頁）。付、「追福恵贈集」・中村敬字、小野湖山、小笠原化堂らの作品、二十七首、五丁（十頁）。

⑩写真数、無し。

⑪体裁、和本、刊本。

⑫大きさ、縦二十・四cm×横十三・五cm。

⑬帙の有無、無し。

⑭所蔵者、福井大学付属図書館（H991-OSA. 90496）。

⑮作者履歴、

大郷学橋、名は穆。通称は卷蔵。字は穆卿。号は学橋・葵花書屋。生地は越前鯖江。鯖江藩間部氏に仕えた。本姓須子氏。浩斎の長男。江戸惜陰堂および城南読書楼の教授。五十二歳で没した。著書に『學橋遺稿』がある。

⑯代表作品

第十六首（七言絶句）を取り上げる。

（この作品は、馬歌東選注『日本漢詩三百首』一九九四年九月、世界図書出版社 西安公司出版発行、二百五十五頁に、この作品と他の一作品、合計二作品が選ばれている。）

首夏村趣	首夏の村の趣
水満秧田長緑針	水は秧田に満ちて緑針長じ、
牛鶏聲静覺村深	牛鶏の声は静かにして村深さを覚る。
前宵一雨足餘潤	前宵の一雨は余潤に足り、
閑却桔槔眠柳陰	桔槔は閑却にして柳陰に眠る。

（脚韻）針、深、陰（下平十二侵）。

⑰所蔵作品表、

『學橋遺稿』（本文・本人の作品） 五十六首。

（詩体） （作品番号）

五言四句 4, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, (十首)。

七言四句 1, 2, 3, 5, 6, 7, 8, 9, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, (四十二首)。

七言八句 10, 11, 12, 13, (四首)。

（追福恵贈集・別人の作品） 二十七首。

五言八句 16, 20, (二首)。

五言二十八句 2, (一首)。

七言四句 1, 3, 5, 7, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 17, 18, 19, 22, 23, 24, 25, 26, 27, (二十首)。

七言八句 4, 6, (二首)。

⑱余説上（本文・本人の作品、五十六首について・考察）。

（一）題名（作品名）について

◎ 題名（作品名）を掲載順に記す。

0 所蔵している（書）・・・題蘭痴翁藏盧象昇眞蹟（三首）。0 題詩・・・題山水、題総不如齋圖。題枯木竹石圖四首、0 自然の風物・・・梅信、自畫竹、畫梅、畫蘭、雨櫻、晴櫻、曉櫻、夜櫻。0 逍遙・・・夏夜追涼二首、首夏村趣、緑陰靜坐。0 悲哀・・・哭橋門翁。0 拝謁・・・謁人麻呂祠。0 自然・・・題漁家壁、不忍池亭雜作四首、不二嶽、尋梅偶雪、東台看花、墨田春遊、醉題酒家壁、游梅莊、春村晚歸、移竹、春日登樓、元日探梅。0 感慨・・・余頃修略史既脱稿偶作（二首）。0 画材・・・畫石、畫梅、畫蘭、蟹、蛙、春夜聽雨、柳陰喚渡圖、雨中觀牡丹、夏日江閣雨望、題前赤壁圖（二首）、餐水、夜聽松聲、溪橋待月、觀瀑圖、題淵明石。

（二）題名（作品名）から見る主題について

◎ 目立つ主題を挙げる。

①、題〇〇詩・・・題蘭痴翁藏盧象昇眞蹟（三首）、題山水、題総不如齋図。題漁家壁、題枯木竹石図四首、題前赤壁図（二首）、題淵明石、醉題酒家壁。（14首）

〔考察〕・・・取り上げている図から作者の個人的な嗜好が見える。

②、自然の風物を詠う・・・梅信、自畫竹、雨櫻、晴櫻、曉櫻、夜櫻、夏夜追涼二首、首夏村趣、緑陰靜坐。不忍池亭雜作四首、不二嶽、尋梅偶雪、東台看花、墨田春遊、遊梅莊、春村晚歸、移竹、春日登樓、元日探梅。雨中觀牡丹、夏日江閣雨望、蟹、蛙、春夜聽雨、（28首）

〔考察〕・・・各作品の表現から作者の審美眼を窺うことが出来る。

③、画材の詩・・・画石、画梅、画蘭、柳陰喚渡図、

題前赤壁図（二首）、餐水、夜聴松声、溪橋待月、
觀瀑圖。（10首）

〔考察〕・・・創作する漢詩・絵画の対象から作者の
忙中閑ありの様子が見える。

④、0 感慨・・・余頃修略史既脱稿偶作（二首）、（2首）

⑤、0 悲哀・・・哭橋門翁。（1首）

0 拝謁・・・謁人麻呂祠。（1首）

〔考察〕・・・歴史、故人、歌聖に対する作者の精神
の有り様の一部が見える。

（三）馬歌東氏が選んだ作品

◎ 中国人の日本人の漢詩に対する評価を参考にす
る。

〔評価〕・馬歌東氏が挙げた作品は印象の鮮やかな
佳作である。

・馬歌東氏が挙げた作品以外の作品にも佳
作はあるがなめらかな作品とは言い難い。

⑩余説下（他人の作品、「追福惠贈集」二十七首につ
いて）

（一）題名について

◎ 作品番号・題名（氏名）を掲載順に記す。

1・哭大郷學橋先生（中村敬字）。2・明治十五年
五月六日與同學諸君共祭學橋君於江東中村樓賦此叙哀
（南摩羽峯）。3・憶舊襍詩（小野湖山）。4・學橋大
郷先輩一周忌辰作白描觀音像一幅併題七律一篇（石川
鴻齋）。5・悼學橋君（藤田吳江）。6・追悼學橋大郷
君（濱村大澗）。7・同（堀口藍園）。8・學橋大郷
君一周忌作之爲雲煙供養揮毫之際愴然畫就不佳如此
（齋藤奇庵）。9・余一日與某氏遊不忍池亭話次及故
大郷君事回顧去・・・明治十五年五月六日（後藤敬臣）。
10・追悼學橋先生（大槻東陽）。11・己未春中次韻學
橋大郷先生所見示春愁詩（小笠原化堂）。12・弔大郷
學橋君（豊島毅）。13・同（川勝占山）。14・學橋大郷
先生薦筵賦一絶（白井和齋）。15・同（操生）。16・哭
學橋先生（清水巴江）。17・大郷先生影前（近藤鐸山）。
18・學橋大郷先生一年祭賦奠（須永輓齋）。19・弔學
橋大郷詞宗（平尾柳外）。20・客歲四月約看花於小金
井君會有病不至賦一律見示因次其韻以弔（野村奚疑）。
21・奉弔學橋雅君追福（渡邊畊石）。22・追悼學橋大
郷君（織田完之）。23・明治壬午五月第六日屬大郷先

生追福清筵乃賦以寄呈（松本宏洞）。24・痛學橋大郷
先生（森貞清）。25・聞大郷學橋先生訃帳然有作（田
中晴莊）。26・憶亡友學橋君（高林五峯）。27・讀大郷
學橋遺詩感賦（兎玉天雨）。

（二）作者の立場について

◎ 作者の立場を作品の題名中に使用している敬称
によって区分する。

①00先生・先輩・・・1, 4, 10, 11, 14, 15, 16, 17, 18, 19,
20, 23, 24, 25. （14作品）

②00君・・・2, 5, 6, 7, 8, 9, 12, 13, 21, 22, 26.
（11作品）

③遺作の詩・・・3, 27. （2作品）

①「先生」は一応年下が使う敬称と見る。もちろん
先輩が敬意を表す場合にも多く見られるから、作
品を詳しく分析する必要がある。しかし、先輩も
含め作者が大郷学郷に敬意を示す存在であると一
応考えておく。

②「君」は年長者と同輩が使う敬称と考えておく。

③ 詩人が遺作を対象として作品を作っている。

〔考察〕①②の作品から友人が多かったことが分か
る。そして、交際の広さを示す結果になっている。
③詩人としての評価については、更に研究
の必要がある。

（三）作者について

◎「追福惠贈集」には当時の各界の著名人の作品が
ある。二、三例を挙げる。

1・中村敬字（一八三二～九一。幕末・明治の人。
名は正直。学者、文学博士、東大教授、貴族院議
員。明六社を起こし「明六雑誌」を出す。翻訳書
『西国立志編』『自由之理』が世に行われた）。

3・小野湖山（一八一四～一九一〇。幕末・明治の
漢詩人。維新後、大阪に優遊吟社を開いた。『湖
山楼十種』八冊等がある）。

11・小笠原化堂（一八三四～九一。勝山藩＜現在の
福井県勝山市＞の第八代藩主。長守。化堂は雅号。
漢詩集『團樂余興』がある。）等である。以上。

〔考察〕作者の交際の広さが偲ばれる。（大尾）